

「分析」とは何の謂いか

——「分析」概念の歴史におけるフロイト——

原 和 之

一つの新たな人間の営みが歴史のなかに登場し、その営みが自らを捉え直そうとするときに、その自己規定はしばしば過去からの切断の身ぶりを伴っている。ただその切断が何に存するかを明確にすることは、必ずしも容易ではない。

1964年のセミナー『精神分析の四基本概念』の冒頭でジャック・ラカンが精神分析の再定義という問題を提起した際、その中心に位置していたのは「精神分析は科学なのか」という問いであったが、この問いの参照先の一つになっていたのは科学史であり、「錬金術」^{アルシミー}と、ラボワジエの時代にそこから抜け出て科学として確立した「化学」^{シミニー}との関係であった¹⁾。ルイ・アルチュセールはこのセミナーを受け止める形で展開された同年の講演「精神分析と心理学」のなかで、精神分析の登場を、ギリシャ数学やガリレオの物理学、またマルクスの社会理論などと同様の、「人類の文化の歴史」のなかで何度も繰り返されてきた「先行する領域との連続性の切断」、いわゆる「認識論的断絶」による「新たな科学的学問分野」の成立のドラマとして明確に位置づける²⁾。この見方によるならば、精神分析の構成する「切断」は、それが人間への生成を「生物学的なものから文化的なものへの移行」³⁾ という形で理解しようとするコンディヤック的ないし観念学的な枠組を顛倒して、文化的なものの先行を主張する点に存するのであって、この顛倒をあくまで従来の枠組の中にとどまる心理学の諸潮流への回収の誘惑に抗って維持している点にラカンの仕事の意義は存するのだ、ということになる。

ともあれこうした「断絶」によって規定される営みが、新たな命名を要請するということが自然なことではない。しかしその命名が、どうして「精神分析」でなくてはならなかったのか。その営みは、いったいどのような点で「分析」的であったのか。フロイトの命名は、彼が提案しようとしている操作を、西欧における一つの概念の歴史に、すなわち「分析」——ギリシャ語の *ἀνάλυσις*、およびそこから派生した英語の *analysis*、ドイツ語の *Analyse*、フランス語の *analyse* 等の訳語として、我々はさしあたりこの語をあてことにしよう——の歴史のうちに書き込もうとするものである。その限りでアルチュセールのいう「切断」は、それが定着されるためには別の連続性を必要としたのだ、と言ってもよいかもしれない。しかしフロイトの議論を仔細に検討してゆくと、そこで彼が「分析」と名づけた営みには、伝統的な「分析」概念の構成要素が、ある独特の布置

をとって現れていることが確認できる。言い換えれば、フロイトの「精神分析」は、既存の「分析」概念の援用にとどまらず、「分析」の概念的布置の組み換えによってその概念史の連続性に新たな切断をもたらすものであるように思われるのだ。

以下でわれわれは、初期フロイトの議論における「分析」という語の導入の経緯とそれを方向づけていた彼のこの概念についての先行的了解、および中期の議論で明示的に与えられた精神分析の分析性をめぐる規定を確認し、ついで西洋思想史の最初期における「分析」概念の用例を参照しながらその基本的な構成要素を粗描した上で、フロイトによる「分析」の記述のうちに、上で述べたような独自の概念的布置が実現していることを見てゆくことにしよう。

1.

フロイトが「精神分析」という語をはじめて用いたのは、1896年のフランス語による論文「神経症の遺伝と病因」であるとされる（なおこのとき用いられた綴りは、現在使われているフランス語の *psychanalyse* とは異なった *psychoanalyse* であり⁴⁾、この表記はフランスへの導入初期の文献で踏襲されていた⁵⁾）。ドイツ語による初出は、同じく 1896年の「防衛＝神経精神病再論」であるが、いずれもフロイトがのちに「精神分析」と呼ばれることになる手法をはじめてまとまった形で述べた『ヒステリー研究』（1895年）よりも後になる点に注意が必要である。

『ヒステリー研究』でフロイトは、自らが行う操作を呼ぶときに一貫して「分析（die Analyse）」ないし「分析する（analysieren）」という表現を用いていた。それではこうした呼称はどの時期まで遡ることができるだろうか。

「精神分析」といった新造語の場合とは異なって、「分析」という語の用例を遡ること自体にさほどの意味はない。というのもこの一般的な語は、とりたてて術語的な価値を持たないまま、たんに詳細な、学問的な、知的な検討というほどの意味で用いられることもしばしばあるからだ。「分析」の語が用いられているということ、このことはそれが独自の操作を「命名」しているということを保証するものではない。したがって「分析」という語の用例の検討は、フロイトが行っていることが、どの時点で特別な命名を要求するような独自の姿を取り始めたのかという点の検討と並行して進める必要がある。

英訳編註の指摘によれば、公刊された論文のなかでの「分析」の出現例は⁶⁾、「分析（die Analyse）」の語については 1894年の論文「防衛－神経精神病」において複数例がある（「心的分析によって（durch psychische Analyse）」（『全集 1』p. 395 [GW-1 61]）、「いかなる臨床的－心理学的分析をもってしても（durch keine klinisch-psychologische Analyse）」（p. 402 [67]）、「催眠分析を通じて（durch eine hypnotische Analyse）」（p. 409 [73]）等⁷⁾。また動詞 *analysieren* のかたちでは 1893年1月に刊行された「ヒステリー諸現象の心的

機制について——暫定報告」(以下「暫定報告」)ですでにその用例が見られ⁸⁾、後で述べる理由から、これらのいくつかについてはおおむねフロイト固有の意味における「分析」の出現例と認めることができる。問題はこれ以前に遡ることができるかという点だが、確認し得た範囲では、たしかに報告や事典項目等で用例は存在するものの⁹⁾、いずれも「学術的、詳細な検討」という一般的な意味を超えて、フロイトが提案しようとする独自の操作を指そうとするものとは認めがたい。

こうして「暫定報告」の草稿をはじめとする資料が1892年に遡って確認されていることをも考慮すると¹⁰⁾、フロイトが「分析」を固有の意味で用いるようになったのはおよそ1892年から1893年の時期ではないかとする仮説が成り立つわけだが、このことは「分析」が命名すべき手法の成立の経緯とも両立する。

＊

よく知られているとおり、フロイトがのちに「精神分析」という言い方で呼ぶことになる操作は、単に学術的な解明の手法ではなく、ヒステリーの治療法としてまず考案されたものである。それによって目指されているのは、人間の精神について何らかの知を得ることではない。より正確には、確かにある種の知の獲得が目指されているのだが、しかしそれは、その「知る」ということが治療者ではなく患者の側に生じ、それが直接にヒステリーの症状の解消を導くと考えられる限りにおいてのことなのである。

この治療を引き起こすような知とは、具体的には心的外傷となるような過去の出来事の想起というかたちで考えられる。『ヒステリー研究』の冒頭に置かれた1893年の「暫定報告」の中で、フロイトはその出発点となった発見を次のように要約していた。

[……][ヒステリーの]誘因となる[外傷的な]出来事の想起を完全に明晰な形で呼び覚まし、それに伴う情動をも呼び起こすことに成功するならば、そして、患者がその出来事をできるかぎり詳細に語りその情動に言葉を与えたならば、このヒステリー症状は直ちに消滅し、二度と回帰することはなかったのである。情動を伴わない想起は、殆どの場合全く何の作用もない。最初に経過した心的過程は、可能な限り生き生きと反復され、《それが生じたときの状態[statum nascendi]》へと戻され、「語り尽くされ」なければならない。その場合、心的過程が刺激現象と関係のあるものだとすれば、痙攣、神経痛、幻覚は、完全なる強度を持って再度出現し、そしてその後、永久に消え去るのである。¹¹⁾

治療の経験から遡って病のメカニズムが考えられ、それによって新たな経験の領野が開かれるというプロセスは、すでにジャン＝マルタン・シャルコーにその例を見ることが

できる。シャルコーは、フロイトが彼の下でヒステリーを研究すべく留学する前の1870年代後半に、金属との接触がヒステリーの症状を解消することがあるという医師デュルクが報告した治癒の現象、いわゆるデュルクスムを検証するなかで、その背後に電氣的・磁氣的な過程を想定し、ヒステリーの症状を統御する手段として、かつて磁気術と呼ばれていた催眠術を利用するよう導かれた¹²⁾。フロイトはこうした師の身振りを異なった形で反復しているということができるだろう¹³⁾。フロイトは治癒が生じた理由を、まず症状の誘因となったトラウマとなる回想の、情動を伴った想起と言語化に、彼の言う「語り尽くすこと (Aussprechen)」に求めるわけだが、すぐあとに「語り尽くすこと」よりもむしろ「暗示」が効果を発揮しているのではないかという疑念に対して彼が反論している箇所、先に言及した「分析する」という動詞表現が登場する。

しかし、そうではない。この種の最初の観察——極度に複雑なヒステリー症例がそのような[上の引用部で述べられているような]方法で分析され (analysiert)、別個の病因を持つ症状がこれまた別個に取り除かれたという時に行われた観察——は1881年のものだが、即ちそれは「暗示療法が開始される以前の」頃のことである。そのような観察は、患者にひとりで起きた自動催眠によって可能となったものであり、観察者をたいそう驚かせた(『全集2』pp. 10-11 [86]、強調はわれわれによる)。

ここで言及されている、「分析する」ことにともなって症状の解消が生じた事例とは、日付からヨーゼフ・ブロイアーによる有名な症例「アンナ・O」と推定されるが、このことがフロイトの手法の成立時期の問題をやや複雑にしている。というのも、フロイトの最初の伝記を著したアーネスト・ジョーンズによれば、ブロイアーがアンナ・O (本名ベルタ・パッペンハイム) を診療していたのは1880年12月から1882年6月にかけてであり、フロイトがブロイアーから彼女の症例についての話を聞いたのは1882年11月18日であって¹⁴⁾、この症例は『ヒステリー研究』刊行の十年以上前からフロイトの参照圏内に入っていたことになるからだ。

ただし、過去のトラウマ的な出来事を想起させることが症状の解消に繋がるというアイデアが、1880年代初頭にまで遡るということは考えにくい。なぜなら1886年に留学先のパリから帰国して後、フロイトが神経症者の治療に用いたのはまず伝統的な電気療法や水療法、安静療法であり、帰国後一年あまりたった1887年末ごろからは、催眠下における暗示を中心とした治療を積極的に行うようになっていくからだ¹⁵⁾。この「暗示」の治療的価値は、それがもつ直接的な対抗効果(「あなたは病気ではない」(「心的治療(魂の治療)」(1890)『全集1』p. 250 [GW-5 309])「あなたはこの場所にはもう痛みを感じません。私がこの場所を押すと痛みは消えています」(「催眠(事典項目)」(1891)、『全集1』p. 266 [GW-Nb 148]))に求められており、その限りで想起による治癒とは異なっ

た原理に基づくものである。ではこうした治療法から、フロイトはどの時点で離れていったのか。1892年に「催眠による治癒の一例」をとりあげた論文はあるものの、1891年の『臨床医のための治療事典』に「催眠（事典項目）」を執筆した頃には、フロイトはすでに催眠技法の限界を明確に把握していたという指摘がある¹⁶⁾。実際「催眠を治療目的で利用することはごくたやすいと思われているが、これは誤謬と言ってよいだろう」（『全集 1』p. 257 [GW-Nb 141]）という言葉ではじまるこのテキストは、催眠の効能を認めつつも、その適用可能範囲を限定し、それが有効にならない（かからない）場合もあることを確認した上で、そうした場合には「催眠を試みることをあきらめるのがよいだろう」（『全集 1』p. 265 [147]）と述べるなど、限定的な効力をもつ治療法として提示する態度が目立っている。これが、実際にフロイトが批判的な立場をとるようになったことを示すのか、あるいは催眠の信頼性を増すためにあえて批判的な立場から検討しているのかは議論の余地があるかもしれない。ただこの催眠がかからない患者が存在するということが、フロイトによる催眠暗示の放棄を強く動機づけていたことが、『ヒステリー研究』における諸症例の記述からはわかる¹⁷⁾。

『ヒステリー研究』におさめられている五つの症例のうち、フロイト自身の症例はアンナ・O 以外の四つだが、このうちエミー・フォン・N の治療は1889年5月から1890年5月にかけて行われ、残る三つの症例はおおよそ1892年秋以降のものである。ただしこれら以外に、まとまった形では提示されないものの、しばしば言及されるツェツィーリエ・M（本名アンナ・フォン・リーベン）夫人の治療があって、これが行われたのが1887年頃から1893年秋までの長期にわたることが知られている¹⁸⁾。

フロイトが「僕の先生（meine Lehrmeisterin）」とさえ呼んだこの患者だが¹⁹⁾、われわれの議論にとって彼女が重要になる理由は二つある。一つ目は、「分析」という語の出現例に関して。彼女はパリでシャルコーの診察を何度も受けていたが、シャルコーが彼女の治療をブローイヤーらから委ねられたフロイトに書き送った手紙に、次のような一節が見られる。「ド・リーベン [フォン・リーベン] 夫人の状態に関して送って下さったお仕事に、深く御礼申し上げます。リーベン夫人が示している、たいへん様々で複雑な身体的・^{アナリシス}心的諸現象についてあなたがなさった、かくも繊細で完全な分析からは、この興味深い人物に対してあなたが、われわれ自身が彼女のバリ滞在中にそうしたのと同様に打ち込んでこられたことを十分に示しています」（1888年9月26日）²⁰⁾。フロイトがヒステリー患者について行った解明が、ヒステリー研究の師と仰ぐ人物から「分析」と名指された最初期の例として、この手紙の一節は記憶に留めるに値するだろう。

そしてもう一つの理由は、フロイト自身が『ヒステリー研究』のなかで、他ならぬこの患者の治療経験がきっかけとなって1893年の「暫定報告」が書かれたと述べていることである。ツェツィーリエ夫人の顔面神経痛に対して、フロイトははじめ催眠暗示によって成果を挙げる（「ある日のこと、再び発作が荒れ狂っていたちょうどそのときに、私は

この女性患者から催眠治療をして欲しいと言われた。私は痛みに対し非常に力を込めて禁止を申し渡した。そうするとその瞬間から痛みは消失した。²¹⁾」。この成果から一年後、彼女の症状は「驚くべき新たな展開²²⁾」を見せる。多数のヒステリー発作が次々と生じたが、これらの症状に続いて、過去の体験が幻覚のようにして浮かび上がり、症状が消えるという現象が繰り返し観察されたのである。フロイトの記述からは、それが「暫定報告」の核心に置かれた治癒現象と、ぴったり重なり合うものであったことがはっきりと見て取れる。

この女性患者が最も良い状態にあるとき、特別な色彩を帯びた病的気分が出現するのだが、彼女はそれを必ず認識し間違い、その気分を数時間前に起きた平凡な出来事に関係づけるのであった。それから意識混濁が増してくると共に、幻覚、痛み、痙攣、長い熱弁といったヒステリー症状が続いた。そして、これらの症状に続いて、最後に過去のある体験が幻覚として出現した。その体験は最初に現れた病的気分を説明することができたし、またそれこそがその都度の諸症状を決定し得ていた体験であった。発作のこの最終部分が終わると共に、明断さが再び戻り、様々な苦痛の訴えは魔法をかけられたように消失し、再び良好な状態が支配的となった——ただし、この状態が続くのは半日後の次の発作までだった。通常私はその状態の極期に呼ばれ、催眠を始め、外傷的体験を再現させ、人為的補助を行うことで発作をより早く終わらせるように試みた。こうした周期的現象を何百回となくこの女性患者と経験することで、私はヒステリー症状がいかに決定されるかについての有益な説明をいくつも手に入れた。更に、この注目すべき症例をブロイアーと共に観察したことが、「暫定報告」を共著で発表する直接的なきっかけとなったのであった。²³⁾

直接的な対抗暗示ではなく、過去のトラウマ的体験の再現が治癒につながるというこの観察は、どの時点で位置づけることができるのか。1890年8月1日付のフリース宛書簡に、ツェツィーリエ夫人と推定される女性患者について、「私の最も重要な女性患者がちょうど今、一種の神経性の危機をくぐり抜けつつある²⁴⁾」、という一節があるが、これが上述の「驚くべき新たな展開」に対応するとするならば、この時期から上記の現象が繰り返されるようになったのではないかと考えることができるだろう。その一方で、こうした経験が「暫定報告」の共著での発表に至った時期については、明確な証言がある。というのは、1892年6月28日付フリース宛書簡で、フロイトは次のように述べているからだ。「この手紙のきっかけは、ブロイアーが除反応の理論やその他のヒステリーに関するわれわれの共同のしゃれをも共同で詳しく発表する用意があることを表明したという出来事です²⁵⁾」。この手紙の翌日に、フロイトはブロイアーに宛てて共同研究について具体的な相談をする手紙を送っているが、彼がその中で箇条書きにする「我々の理

論」の構成要素の中には、「想起」や「外傷」がすでに含まれているほか、中で言及されている「最良の二つの病歴」については、これが「アンナ・O」と並んで「ツェツィーリエ・M」を指すとする推定がある²⁶⁾。

以上を総合すると、次のように言うことができるだろう。「分析(する)」という用語を、トラウマ的体験の想起を原理とするヒステリーへの治療的介入という意味で用いた最初期の例に属する1893年の「暫定報告」において、明示的に参照されている1881年の観察とは「アンナ・O」のものと考えられるが、「アンナ・O」の症例がもつそうした意味が把握されたのは事後的に、ツェツィーリエ・M夫人の治療経験を通して、それも彼女の症状が大きな展開を見せた、おそらくは1890年夏以降であったと考えられる。この時期以降、ツェツィーリエ・M夫人のもとで「何百回」も繰り返された「周期的現象」を見るうちに、おそらく治癒のメカニズムへの洞察と相関して独自の治療的介入のかたちが徐々に定まり、さらにそれを指す言い方として「分析」という表現が術語的に定着していったのではないかと、という推測が成り立つだろう²⁷⁾。

2.

「分析」の語がフロイトにとって特別な意味を持ち始めた正確な時期については推測の域をでないが、先に言及したシャルコーの手紙もあり、比較的早い段階であっても不思議ではないように思われる。ただ、フロイトの方法があくまでツェツィーリエ夫人の症例の検討の中で形成されたものであるとすると、それを直接の契機として公刊されたという1893年の「暫定報告」以前に遡ることは、新たな資料が発見されるなどのことがないかぎり、あまり意味がなさそうだ。そこで今度は、1893年をさしあたりの起点として、そこから『ヒステリー研究』の公刊された1895年前後の時期までのテキストを参照し、フロイトが「分析」をどのような意味で了解しつつ用いていたかを見てみよう。

すでに言及した、1894年の「防衛－神経精神症」中の「分析」の用例のうち幾つかは、患者への直接的な働きかけを含意している。「わたしが分析した患者たち」(『全集1』p. 396 [GW-1 61], 397 [62])や「知的な患者たちの心的分析」(p. 395 [61])といった表現ではやや曖昧ながら、「催眠分析」や「臨床＝心理学的分析」(『全集1』p. 409 [73])といった言い方には、問題の「分析」が患者に治療的な場面で適用されるものであることが明示されている。同じく1894年以降、フリース宛の手紙には、同様の含意をもって用いられる「分析」という表現が現れてくるようになる(「彼女には分析が不快なものであったということを僕は喜んで信じていますが、そのことによって彼女は「防衛」の概念が正しいことを裏書きしたのです。彼女も三回目に僕のところから逃げ出しました」²⁸⁾「Me夫人は歓迎されます。もし彼女が金と忍耐を携えて来るなら、僕たちは彼女を立派に分析するでしょう」²⁹⁾「僕は労働能力が絶頂にあり、一日に九時間から十一時間の重労働、

六つから八つの分析的治療を行っています³⁰⁾(いずれも強調はわれわれによる))。ただしこれらからは必ずしも、フロイトが自分の治療的介入のどのような点に「分析的」な要素を見ていたのかがはっきりしない。一方 1895 年刊行の『ヒステリー研究』は、おおむね「暫定報告」以降のフロイトの「分析」についての理解を示す資料として読むことができるが³¹⁾、そこで確認できる用例からは、「分析」が患者への介入を含意しつつ使われているという以外に、次のような基本的特徴が見て取れる。

(1) 「分析」の対象となるのは、個々の症状である。

フロイトのいう「分析」で問題となるのは、患者の全体的な行動や性向・性格や人格ではなく、「難聴」や「焦げたケーキの臭いが(そうしたものがないのに)する」といった具体的な症状である³²⁾。この症状が「誘因となっている外傷との間にまさに厳密な関係を持っている」³³⁾ という洞察をもとにして、

(2) 「分析」においては現在の個々の症状から、過去のトラウマ的出来事へと進んでゆくということが問題になる。この出来事を必ずしも患者は症状と結びつけて考えていないため、この作業ははじめ、症状をもとにした「連想」という形をとる。そしてこの連想の中に問題の出来事への糸口を探ることが行われるのである³⁴⁾。さらにヒステリーが複数の症状からなる限りにおいて、一つ一つの症状についてこれを繰り返す、ということが「分析」の作業には内在している。

このプロセスは、現在から過去への「遡行」であるが、同時にあるときには一般的な言い方で、症状の「土台」となり、それを「規定」するものへの遡行として、またあるときには明示的に「原因」ないし「病因」への遡行として捉えられている³⁵⁾。さらにそれは、隠れていたものを徐々に明らかにしてゆくプロセスとして、一つ一つの層を取りのけてゆく、発掘の作業になぞらえられていた³⁶⁾。

(3) ここで注意が必要なのは、この遡行が強い意味で捉えられなくてはならないという点である。すなわち、患者があくまで現在の時点に身を置きつつ過去の事象を回顧するというのではなく、過去のトラウマ的な場面に立ち戻らなくてはならないということであり、こうした含意はそもそも「暫定報告」において治療的效果を生じるためには「心的過程」の「反復」が重要であるとされていたこと³⁷⁾、また『ヒステリー研究』を通して「想起 *die Erinnerung*」とともにしばしば「再現(する) (*die Reproduktion / reproduzieren*)」という表現が使われること³⁸⁾に加えて、「暫定報告」で指摘された治療の観察を補強するものとして引用されているデルプフとビネの著書の一節からも裏付けられる³⁹⁾。問題の「遡行」は出来事の連鎖を、外側から目で追うように逆に辿ってゆく、という仕方ではなく、いわばその連鎖の内側に或る仕方で入り込む⁴⁰⁾というかたちでなされなくてはならない、というわけだ。

「遡行」としての「分析」という構想は、『ヒステリー研究』の翌年 1896 年の講演「ヒステリーの病因論のために」では繰り返し明示的に述べられている(「ヒステリー性嘔吐

という症状があるとします。その場合に私たちは、分析が症状のある体験にまで遡らせることによって (zurückführt)、その体験が、たとえば、腐乱しつつある人間の死体を目撃したというような、当然のことながら強度の嘔気を催させるものであったとすれば、このヒステリー症状の原因を (ある種の残余を除いてではありますが) 見通すことができたと思うわけであります」(『全集 3』 pp. 222–223 [GW-1 428])。「分析によって、症状が、即座に、十分な〔症状の種類を〕決定する特性と外傷力を備えた外傷場面に還元され (zurückführt)、その還元によって (durch solche Zurückführung) 症状が同時に除去されてしまうような稀な症例」(『全集 3』 p. 227 [432])。分析がたどるのは、さしあたって「連想想起」の連鎖とされており、時間的な前後関係は必ずしも前提されていないように見えることもあるが、最終的には「時系列の逆方向に」(『全集 3』 p. 229 [434]) 発見が進んでいくと考えられている⁴¹⁾。また同様の「遡行」の含意は、同年の「防衛－神経精神症再論」でも確認できる(「強迫行為は——奇妙であるにもかかわらず——それが克服しようとしている強迫の想い出に遡ること (Zurückführung) によっていつでも十分に解明しうるということを、心的分析が証明している」(『全集 3』 p. 204 [GW-1 389–390])。以上強調はわれわれによる)。

*

こうして初期フロイトにおける「分析」の用例を検討した結果浮かび上がってくるのは、彼がこの用語を「遡行」——それが時系列の中で考えられるべきか、あるいは因果関係や規定の系列の中で考えられるべきかという点はさしあたり措こう——という意味で了解しつつ使っているということである。ところが奇妙なことに、この先行的了解は、中期の論文でフロイトが分析の分析性に直接言及するときには影を潜め、かわって「分解」という意味が前面に押し出されることになる。やや長くなるが、1918 年の「精神分析療法の道」から引用しよう。

患者のなかの抑圧された心〔の蠢き〕を意識に上せる作業を私たちは精神分析と名づけました。どうして「分析」なのでしょう、解体、分解 (Zerlegung, Zersetzung) を意味し、また自然のなかに見出され、実験室に持ち込まれる物質に対して化学者が行う作業との類比を想起させるこの言葉なのでしょう。なぜなら、ある重要な点において実際にそのような類比関係が成りたつからです。患者が見せるもろもろの症状、病的な表れは、患者の心の活動すべてがそうであるように、複雑に合成されたものであり、こうした合成物の要素は、根底では、動機であり、欲動の蠢きなのです。しかしながら、患者は基本的動機について何も知らないか、知っていたとしてもそれはとても不十分なものです。そこで私たちは患者がこうした高度に

錯綜した心の形成物の合成を理解できるようにし、症状を、その動機となっている欲動の蠢きに還元し、患者にとってそれまで気づかれずにいた欲動動機を症状のなかに検出します。それは根元的物質、化学的元素を化学者が塩類から分離させるのと同じです。そうした元素は、この塩のなかで他の元素と結合して見分け難くなっていたのです。また同様に、患者にとっては病気だとみなされていない心の表れについても、その表れを動機づけているものは本人には不完全にしか意識されておらず、本人が知らずにいる他の欲動動機がそれらの表れにおいては一緒に作用したのだと私たちは患者に知らせます。

人間の性的追求を解明するにあたって、同様に私たちはそれをいくつかの構成成分に分解しました。そしてある夢を解釈するに際しても、夢の全体像には触れないまま夢を構成している個々の要素に連想を結びつけるというやり方をとりました。

[……] 私たちが患者を分析したというとき、それが意味するのは、患者の心の活動をその要素となっている成分へと解体し、これら欲動成分を一つ一つ個別に患者のうちに見つけ出したということです⁴²⁾。

「遡行」から「分解」へ。フロイトにおけるこの「分析」概念の変容の背景には、何より彼の方法そのものの中心が移動したということがある。はじめはトラウマ的な出来事を、ついで無意識の欲望を明るみに引き出す作業としての症状の解釈こそが、「分析」の中心をなすと考えられていた。これはそれを通して症状の「意味」を患者に知らせるということが、直接に治療的な効果をもたらすと考えられていたからである。ところがこの治療方法が普及するにつれて、この「解釈」が、必ずしも患者に受け入れられず、所期の目的を達成しないことがあることが問題となってきた。1910年前後の時期に集中して著された技法論において、フロイトはこの問題を焦点化し、そこで自らの手法を「症状の解釈」ではなく「抵抗の分析」として再定義する。ここで生じた転回を、フロイトは1910年の論文「「横暴な」精神分析について」で次のように要約していた。

患者は一種の無知の結果として病んでおり、(患者の生活・人生と病気との因果関係や患者の幼児期体験などについて) 伝えてやることによってその無知を取り除きさえすれば、患者は健康になるはずだ、などというのは、とうの昔に克服されている、表面的な外観にとらわれた見地にすぎない。この無知それ自体が病気を引き起こす契機なのではない。この無知を最初に喚起し今もなおそれを下支えしている内的抵抗 (innerer Widerstand)、ここに無知が根ざしていること、それが病気を生み出す契機なのである。この抵抗を駆逐することに治療の課題がある⁴³⁾。

この「抵抗」のうちもっとも強力とされるものが、いわゆる「転移」の現象である⁴⁴⁾。

人間の他者ないし「対象」との関係を、基本的に欲望にかかわる、「リビード」的なものとしての側面から主題化する精神分析は、同時にその関係を可塑的なものとして、すなわち専ら生物学的な本能によってあらかじめ定まったものとしてではなく、成長の過程でさまざまに形成されるものとして捉えている。その議論は、摂食や排泄といった基本的な活動にかかわるさまざまな「(部分) 欲動」から出発して、自分以外の人間への愛情関係にいたるリビードの関係の形成過程をめぐる議論、いわゆる「リビード発達論」として具体的に展開されることになるわけだが、そのなかで特に強調されているのが、「クリシェ (印刷原版)」の比喩をもって語られるその反復的な性格である。

[……] どんな人間も、生まれつきの素質と子供時代に受けた影響との共同作業によって、自分固有の性愛生活の営み方を獲得するものである。それゆえ、愛にどのような条件を課すのか、またそれに伴いどのような欲動を満足させ、いかなる目標を設定するのかに関しても、その人固有の特徴が出てくることになる。このことによって、その人には一つの (あるいは幾つかの) クリシェが産み出され、外的事情と手に入れうる愛の対象の性質とが許容してくれるかぎりにおいて、そのクリシェは生活を送るなかで規則的に繰り返され、新たにコピーされることになる⁴⁵⁾。

この反復を支えているのは欲望であり、得られないものが求められ続けるというその基本的な機制であって、これに基づいて人生の初期に成就されなかった愛情関係の対象が、現在の医師のうちに探し求められることがある。これが「転移」である。この現象自体はすでに『ヒステリー研究』の中で治療の作業につきものの妨害として指摘されているが⁴⁶⁾、中期の議論で異なるのは、その源が主体の発達の初期に求められている点である。「[……] 愛への願望が現実によって限なく満足させてもらえない者は、新たに登場してくるあらゆる人物に向かって、リビードにみちた期待表象を抱かざるをえないことになる」わけだが、

してみれば、部分的に不満を感じている者が、期待を込めて準備したリビード備給を医師という人物にも振り向けたとしても、それはまったく正常で理解可能なものである。われわれの前提とするところによれば、この備給は模範に、つまり、当該の人物のうちに存するいずれかのクリシェに、接続されることになろう。あるいは、こうも言えるだろうが、備給は、苦しんでいる者がそれまでに形成してきた心的「諸系列」のいずれかのうちに医者を押し込めるであろう。そして、系列へのこの編入にあたって (ユングのうまい言い方に従うなら) 父のイマージが標準となるとしたら、それは医師に対する実際の関係に見合っている。しかし転移はこの模範に拘束されているわけではなく、母ないし兄弟などのイマージに従っても生じうる⁴⁷⁾。

「抵抗」の最たるものとしての「転移」の現象は、発達の初期にとり結ばれた他者への愛の関係をその前提として持っている。そして現在において「転移」を支えているその愛が、過去において成就しなかった愛の反復であり、さらにその愛が、必ずしも他の人間に向けられるのでない、身体に根ざしたさまざまな「欲動」という前史を持っている。「分解」としての「分析」という概念が登場してきた背景には、このようなフロイトの構想の展開がある。ただ、1910年の時点では、「無知」が病の原因であるとする考え方は否定されているものの、「分析」の基本的な枠組は保存されているようにみえる。すなわちそこでは相変わらず、患者に知をもたらし、あるいは患者を知にもたらしことによる治療的な効果が期待されている。分析は、患者が不十分にしか知らない、症状を構成する動機となっているさまざまな欲動を検出し知らしめるが、ただその知は直ちに症状の解消をもたらすのではなく、抵抗の克服の手がかりとなることによって治癒への道を拓くものと考えられている。要するに同じ「分析」の語が、フロイトの方法の異なった局面を指して用いられている。それはまず、直接に症状の解消をもたらすはずの、誘因としてのトラウマ的出来事への「遡行」というかたちで実現する知を指して用いられ、次いでそうした「遡行」が実現しない事例について、それを妨げる抵抗の克服を促すために行われる、症状を構成する諸欲動への「分解」というかたちで実現する知を指して用いられているのである。

3.

こうしてフロイトの方法が、その展開の過程で遂げた大きな転回にもかかわらず「分析」の呼称を維持しえた背景には、西欧の思想史のなかでこの語が様々な文脈におかれるうちに、一定の意味論的な広がりを持つようになっていたということがある。その起源をたどってゆくと、われわれは古代ギリシャにおける幾何学と論理学にまで遡ることになるだろう。ここではそのそれぞれにおいて提示された特徴的な「分析」概念について、当面の議論に必要な範囲で整理しておこう⁴⁸⁾。

幾何学の分野における「分析」概念の最初期の定式化としてしばしば参照されるのは、エウクレイデス『原論』第13巻1から5にかけての別解で示された定義である⁴⁹⁾。

分析 [ἀνάλυσις] とは何か、そして総合 [σύνθεσις] とは何か。

分析において、われわれは求められているものを認められたと見なす。というのもそこからわれわれは、認められている何らかの真理に達するからである。

総合において、われわれは認められているものを取り上げる。というのもそこからわれわれは結論に、あるいは求められているものの知解に達するからである。⁵⁰⁾

「分析」と「総合」が対概念として用いられるということ自体はわれわれにとってもなじみの深いところだが、「分析」を分けることとして、「総合」を合わせることとして考える一般的な理解からは、この定義のいわんとするところは判然とししない。幾何学の証明論の文脈で「分析」が意味するのは、問題を解くための、ある種の技法である。すなわち証明すべき命題が与えられたときに、この命題が真であると認められたとして、そこから辿ることのできる帰結のなかに、すでに真であることが知られている命題がないかどうかを探る。これが「分析」である。ただしこの操作は、それ自体としては問題の解決とはなり得ない。というのも「偽のものから真のものが出てくる」、すなわち間違った命題の帰結として真の命題が出てくることがありうるからであって、そのため見いだされた既知の命題から実際に問題の命題が導き出されるかどうか確認することが必要になる。この作業は成功すればそれが証明となるわけだが、こちらが「総合」と呼ばれることになる。

アレクサンドリアのパッポスの『数学集成』ではこうした「分析」概念の定義がより詳細に展開された形で示されているが⁵¹⁾、そのなかでは「総合」が帰結や原因を「その自然な順序に」配列することと結びつけられているのに対して、「分析」は「解決の逆転」であるとされる。ここから分かるのは、「分析」が、通常の論証の過程の「逆行」ないし「遡行」として捉えられているということであって、これは「分析」が「総合」と対にして考えられるときにとりわけ強調される性格であった。しかし「分析」の本来の定義では、もう一つ別の要素が前面に出ている。すなわち、「想定」という要素である。この操作が孕む、特異な所与性に注意しよう。

エウクレイデスに帰される著作のなかに、『デドメナ』と呼ばれる小著がある。「分析」に有用な補助定理を集めたこの著作だが、これが「与えられたものども」を意味するギリシャ語 *Δεδομένα* を表題としているのは、そこで取り上げられている命題が「もし……が与えられると……もまた与えられる」という形式をとるためであった⁵²⁾。同様に、『原論』の別解で言われていた「分析において、われわれは求められているものを認められたと見なす」とはすなわち、当該の命題の真理性が与えられていないにもかかわらず、与えられたと^する、ということに他ならない⁵³⁾。ここで問題になるのは、思考のすぐれて行為的かつ創出的な次元であり、与えられたものを乗り越えて進むという点において、最終的には隠喩や虚構とも同じ起源をもつ主体性の側面である。他方その思い為しから出発してなされる諸帰結の展開は、あくまですでに真であることが認められた諸定理に従ってなされることになる。こうしてひとつの問題の解決をめざし敢えてなされる主体的な「想定」とそれを起点として行われるあくまで論理的な「遡行」、これが幾何学的な「分析」概念を特徴づける二つの要素となるのである。

さて論理学における「分析」概念は、この幾何学的な「分析」概念を参照しつつも、それとは異なった形で練り上げられる。主要な参照先は、アリストテレスの『分析論前

書』および『分析論後書』である。この書名『分析論』の由来について、アリストテレスの初期の注釈者として知られるアフロディシアスのアレクサンドロスは、アリストテレスの上記著作における「分析」を幾何学における「分析」と対比させて次のように述べていた。

それらが『分析論』と呼ばれるのは、何であれ総合されたものを、その総合されたものがそこから総合されるような諸々のものへと還元することは分析と呼ばれるからである。分析とは総合の逆である。というのも総合とは、諸原理から出発して、諸原理に依拠しているものへと進んでゆく道であり、分析とは終わってから諸原理へと戻ってくる道であるからだ。幾何学者が分析していると言われるのは、結論からはじめて、結論の証明に向けて立てられる諸前提の間を秩序立てて進んでゆき、問題を諸原理へと帰着させたときである。あなたが複合的な物体を単純な物体に還元したとすると、その場合もあなたは分析を用いている。あなたがそれぞれの単純な物体を、その物体の存在が依拠している諸事物——つまり質料と形相——に還元したとすると、その場合もあなたは分析をしている。あなたがことばをことばの諸々の部分へと還元し、あるいはそれらのことばの部分の諸音節に分割し、それらの音節を諸々の文字へと還元したとすると、その場合もあなたは分析をしている。そしてあなたが複合的な三段論法を単純なそれに還元したとすると、あなたはその語の特別な意味において「分析」していると言われる。単純な三段論法をそれらが存在するもとになる諸前提へと還元したとすると、その場合もそうである。不完全な三段論法を完全なそれへと還元することも分析することと呼ばれている。また所与の三段論法を、それに相応しい格へと帰着させることも分析と呼ばれる。そしてとりわけまさにこの意味で、この書物は『分析論』と呼ばれているのだ。というのもアリストテレスは[『分析論前書』の]第一巻の終わりで、我々がそれを行うことができるようにする一つの方法を記述しているからである⁵⁴⁾。

ここでも「分析」はある系列との関わりで規定されているのだが、しかしその系列は因果関係や基礎付けの関係ではもはやなく、述定構造を持つ命題を単位として展開される推論の系列である。この論理的な「分析」において問題になるのは、与えられたとされた顕在的な命題(ないし作図)から出発して潜在的な系列を展開し、これを「遡行」するということではなく、与えられた顕在的な推論の系列から出発して、それが不完全な場合には欠落を補うなどして完全な形にした上で、これを形式化された格型式へと帰着させるということであった。そしてこの中で前面に押し出されるのが要素への「分解」という操作である。これは三段論法の「格」がその三段論法を構成する大小二つの前提および結論の命題の種類に依存し、さらにそれぞれの命題の種類がその命題を構成する

主語と述定の種類に依存する以上不可避なことであつたといえるだろう。

とはいえこのことは、アリストテレス的な「分析」概念がもっぱら「分解」ないし要素への「還元」として考えられるべきだということを意味するものではない。ポール・タヌリはその論文「ギリシャ人における「分析」と「総合」という語の意味、および彼らの幾何学的代数について」において⁵⁵⁾、語源的には「総合」が通貨を数える際に一定数の貨幣を包んだり袋に入れたりしてまとめる操作を、「分析」がそうしてまとめたものをばらばらにする操作を意味していたと指摘する（この意味で「分析」はつねにあらかじめ行われた「総合」を前提している、とするタヌリの指摘は、興味深い）⁵⁶⁾。ここには「分解」という含意がはっきり表れていると言えるが、その一方で、タヌリはこうした「分解」という意味での「分析」と、論理的な「分析」を性急に同一視する見方を戒めて次のように述べていた。

アリストテレスの時代になると、分析という用語は論理学において、推論を標準となる形式に還元するということを意味するために導入される。[……]とはいえこの論理的な過程という意味においては、分析は算術的な操作という意味においてそれが持っていたのと同じ、語源的な意味を持っていたのでは全くない。ここでは、源となるのはほどくべき結び目の比喻であって、この結び目は厄介な問題、難問、謎と同一視されている。それに答えるための自然な進み方は、まず解を提示し、しかるのちに真なるものとされたこの解から出発して、提示された諸条件をそれが満たしていることを示す（解明、分析）ということである。こうした進み方は実際まさにエウクレイデスの事例においてあらわれる進み方である⁵⁷⁾。

論理的な「分析」概念をむしろ幾何学的なそれに近づけて理解しようとするこうした構想を、タヌリはここでこれ以上展開することはしていないが、この構想を一層詳細に展開した最近の研究にパトリック・H・バーンの著書『アリストテレスにおける分析と学知』がある。このなかでバーンは、アリストテレスにおける「分析」という用語の用例を検討し、単純な「分解」ないし「分割」という意味で用いられる「分析」がむしろ少数派に属するというを確認した上で⁵⁸⁾、アリストテレスにおける論理的な「分析」の操作を次のように説明していた。一般に三段論法による推論ということで考えられるのは大前提と小前提から結論が導かれるという形式であり、この結論が別の命題と前提をなして新たな結論を導くというかたちで、この形式はさらに展開されることができる。しかしとりわけ『分析論前書』の終わりでアリストテレスが興味を持っていたのは、かならずしもそうした定型的な形式を明確にとることのない、一般的な「複合三段論法 (polysyllogism)」ないし「連鎖式 (sorites)」によって提起される問題であった。このような観点から見たときに、「推論を分析する」ということは、(1) 整った推論形式を

もたない「言葉の連なり (a string of words)」⁵⁹⁾ のなかに「結論」にあたるものを同定し、(2) この結論を分析してその論理形式および対応する前提が何でありうるかを規定した上で、(3) それらの前提のうちのどれかが、のこりの「言葉の連なり」のうちに見いだされないかどうかを見てみる、という操作を含意しているとバーンは指摘する⁶⁰⁾。さらに単に前提と結論が明示されていないだけでなく、前提のうちに欠落しているものがある場合も考えられるが、そうした場合に「分析」には、想定される推論形式とともに、失われた前提を発見することまで含まれることになるだろう。

こうしてバーンの整理によるアリストテレスの論理学的「分析」概念は、ギリシャ語の「アナリシス分析」が語源的に持っていた「分解」ないし「分割」という語義を、幾何学的「分析」概念を特徴づけていた「想定」と「遡行」という二要素との関わりで位置づけることを可能にするように思われる。「言葉の連なり」のなかに可能な「結論」を同定するという操作は、これをその他の部分から際だたせるということを含意する限りにおいて、たしかに要素への「分割」という側面を持つ。しかしその一方でこの「分割」は現実の分割ではなく、あくまでそれを「結論」として「想定」するというのにとどまる。しかもこの操作は、それ自体で完結するのではなく、それを含んで可能な推論形式を考えつつ、そこを起点に諸前提の方に「遡行」することを目指すものだ。さらにこの「遡行」のなかで、場合によってはそこにあるはずの前提が見いだせないということがありうるわけだが、そうした場合に分析の作業はそこにその前提を「想定」しつつ、最終的に推論全体の格型式への還元を実現するのである。

バーンはアリストテレスの論理学において、要素への還元と全体性の解消とみえる操作が同時に「全体的な相互関係の知解可能なパターンの発見」⁶¹⁾ と結びついていることを強調して、「分割 (decomposition)」という言い方に代えて「解きほぐし (disentangling)」という言い方を採用しているが⁶²⁾、これはギリシャ語のアナリシス分析がもともと持っている「ほどく (dénouer)」という語義に一層近いといえる。上で引用したタヌリの主張に抗って言えば、「結び目を解く」という表現は単なる比喻を超えて、問題となる操作をより近いところから記述する言い方となりえているように思われる。すなわち纏れた糸をそのまま取り扱うのではなく、それをほぐして選り分けた一つ一つの糸の水準に注目することこそが難問の克服につながるというわけだ。そしてこのアリストテレス論理学において、「分析」概念は「想定」と「遡行」に「分割」を加えた三契機からなる一つの布置をとることになるのである。

さて、こうして「想定」「遡行」「分割」の三点で確保された「分析」概念の広がり、つねに維持されてきたわけではない。それどころか、現在の「分析」概念において、これをもっぱら単純な要素への分割と見る見方が根強いことは、さまざまな形で確認することができる⁶³⁾。それではこの「分析」概念における「分割」の優位はどこに由来するのか。バーンはこれをすぐれて近代的な「分析」観であるとして、その起源にフランシ

ス・ベーコンを位置づけつつ、「経験を分解し分離し (solvat et separet)」、「この真実の世界そのものの本性を見抜き、いわば解剖する (dissecare)」⁶⁴⁾ ことをめざすこのベーコン的な「分析」概念が、自然科学に浸透していったことにその理由を求める見方を提示している。ただバーン自身、ニュートンの『光学』から彼の「分析」概念を示す一節を引用した部分の註で述べているとおり、科学の分野においても「分析」概念はただちに、そして専一に「分割」を意味していたわけではなく⁶⁵⁾、「分割」としての「分析」という通念の確立の過程は、それ自体一つの大きな思想史的主题となりうるものであると言える。ここではこの主題を正面から取り扱うことは出来ないが⁶⁶⁾、一つ言えるのは、近代において「分析」概念がもっぱら「分割」の側面に切り詰められてゆくなかで、「遡行」にまず定位したフロイトの「分析」概念が、一面で三つの契機を含む古代ギリシャ的なその広がりやを回復しようとするものであるように見えるということだ。ただしこれは、フロイトがエウクレイデス幾何学の、あるいはアリストテレス論理学の「分析」概念を反復しているということではもちろんない。フロイトの「分析」において、「想定」「遡行」「分割」という三つの契機はどのような独自の布置を構成しているだろうか。最後にこの点を見てみることにしよう。

4.

すでにわれわれは、フロイトの「分析」概念が、その初期には「遡行」という暗黙の理解のうで用いられ、次いで今度は明示的に「分解」という側面を強調されて現れるのを見てきた。とはいえこれは、同じものを見る見方が前者から後者へと移行したということではなく、ある一連の操作の異なった局面が焦点化されたということである。その意味で、「遡行」から「分解」への移行を、近代的な「分析」概念への縮減と見るのはあたらない。そうではなく、ちょうどアリストテレス論理学で「分析」概念における結論の「同定＝分割」が「遡行」のためのものであることが確認されたように、フロイトの「分析」概念で強調された契機の傍らには、常に他の契機が潜在している。そしてこれらの契機の接続の様態を示すことによって、われわれはフロイトの「分析」概念に固有の概念的布置を明らかにすることができるだろう。

まず根本的な違いとして強調しておかなくてはならないのは、フロイトの「分析」の主体をめぐる問題である。幾何学と論理学の分野で「分析」を行うのは誰か。幾何学者であり、論理学者である、とする答えに大きな異論はないだろう。これは同じ一人の人間が、(命題の真理性や作図を、あるいは「言葉の連なり」を)「想定」あるいは「分割」し、そうして(基礎付けの、あるいは推論の連鎖を)「遡行」するからである。しかし精神分析の場合、その主体は分析家であると単純に言うことはできない。というのも、遡行すべき連鎖はあくまで患者の側にあり、患者自身が想起し再現するという形でその

遡行を果たさなくてはならないからだ（幾何学的な分析も同じように潜在的で展開されなくてはならない連鎖を相手にするが、その連鎖は一般的な基礎付けの関係として、幾何学者自身が展開できる状態になっている）。このため分析理論の中では、受動的な立場を含意する「患者」や「被分析者」のかわりに「分析主体 (analysand / analysant)」という言い方が好んで用いられることになるわけだが、このことは分析家が担うべき「分析的」機能をいっそう厳密に規定するようわれわれを促している。ともあれここではさしあたって、精神分析が「二人組精神病 (folie à deux)」ならぬ「二人組分析 (analyse à deux)」とでも言うべき性格を持っていることを確認するにとどめよう。

なお精神分析で問題になる「遡行」は、初めから「遡行」であるわけではない。すなわち因果関係や時間関係で先行する原因や過去がどちらにあるかわかって進み出すわけではなく、あらかじめ方向付けられていない「連想」という形をとるのであり、この点で顕在的な「言葉の連なり」によって方向を定められている論理学的分析より発見法的に利用される幾何学的分析の操作に近いと言える。さらに、「遡行」を条件づける、その起点を定める操作に関して言えば、症状というかたちで問題となっているものがあらかじめ提示されているという意味では、やはり幾何学的な分析に近いように思われるかもしれない。そこで連鎖への遡行の道を開くのは、真理性ならぬ「意味」の、あるいは「厳密な関係」ないし「象徴的な関係」の想定である。しかし、同時にそこには、複数あるヒステリーの症状を一つ一つ取り上げて連想を行うということが問題となっている限りで、「分割」の契機も指摘することができる。この契機は、フロイトが『ヒステリー研究』で培われた方法を、『夢解釈』に適用する際にいっそうはっきりと現れてくるだろう。「まだ不慣れな患者に、この夢に対しては、どんなことを思いつきますか、と尋ねても、患者は、自分の精神的な視界から、何も掴み出せないのが普通である。そんなときには、私は患者の夢を、ばらばらにして見せてあげる。そうすると、その個々の断片に対して、一連の思いつきが浮かんでくるのを、患者は私に話してくれる。⁶⁷⁾」夢を「何かの寄せ集めのようなもの、ないしは、心的形成物の凝集体」と見なした上でなされる「《細部》解釈 (eine Deutung *en détail*)⁶⁸⁾」においては「分割」こそが「遡行」の起点を定めるのである。

さて、幾何学的分析の場合には、「遡行」のなかで既知の命題——証明の真の起点となるべき命題——が出会われることが、主体が知へと向かう転回点となっていたわけだが、これに対して精神分析の「遡行」で転回点の役割を果たすのは、連鎖の中断や脱落である。『ヒステリー研究』で取り上げられた患者エリーザベト・フォン・Rの症例は、フロイトが自分の行った初めての完全な分析と位置づけ、これを通して一つの治療的な手続きが成立したと述べている症例であるが、この手法を説明して彼は次のように述べていた。「この手続きは、病因となる心的素材を層ごとに除去していくというやり方であり、我々はそれを埋没した町を掘り起こす技法に好んでなぞらえたものであった。私はまず

女性患者に知っていることを語らせた。そして、つながりが謎めいている個所がどこにあるのか、因果の連鎖の中で欠落部分があるように見えるのはどこかについて入念に注意を払った。そしてその後そういう個所を見出すと、私は催眠術的な探求やそれに類似した技巧を用いて、想起のより深い層へと押し入ったのである。⁶⁹⁾「それに類似した技巧」とは、催眠術が成功しない際に代替として用いられた圧迫法であると考えられるが⁷⁰⁾、この方法ももはや所期の目的を果たし得ない段階になったときに、フロイトの技法にとって、そして彼の「分析」概念の形成において決定的に重要な瞬間が訪れる。すなわち「想定」の瞬間である。圧迫法を施してもエリーザベトが何も思いつかない、と主張したとき、フロイトは初めその言い分を受け入れて、作業を中断・延期することになっていた。

しかしながら、二つのことに気がついて、私は自分の振舞いを変えることに決めたのである。一つ目は、この方法におけるそのような不首尾は、エリーザベトが陽気で痛みから解放されているように見えるときに限られ、彼女の状態が悪い折に出会ったときには決して起きないということであった。二つ目には、何も見えません、と彼女が言うのは、しばしば長い間黙りこくった後で、その沈黙の間、彼女は緊張して何かに没頭しているような顔つきをしており、そこから彼女の内では何らかの心的事象が生じているのを見てとれたということであった。そこで私は、次のように想定することに決めた (Ich entschloß mich also zur Annahme)。すなわち、この圧迫の方法は決して不首尾に終わるものではない、と。つまり、私が手で圧迫するとき、必ずエリーザベトの頭には何かが思い浮かんだり、また何かが眼前に見えたりするのだが、彼女が毎回それを私に伝える気になるわけではなく、呼び覚まされたものを再び抑え込もうと試みることもある、ということだ。⁷¹⁾

そしてこの想定を伝えた上で、頭に浮かんでいることを、批判を加えずに伝えるよう求めることで、分析は膠着状態を脱して一定の成果を得られるようになったとフロイトは述べている。

この部分について、われわれの観点からは次の二点を指摘しておこう。

(1) ここで問題になっている「想定」は、与えられたものを超えて進む主体的な決断という性格(「想定することに決めた」)を持っており、その限りでラカンがのちに指摘することになる「無意識」の——というのもこの決断＝想定の開示されるものが「無意識」とよばれるべきものであるからだが——存在的ではない、むしろ倫理的な境位を支えている⁷²⁾。そして、われわれが検討した分析の二つの先行形態の内では幾何学的な分析を構成するそれに近いこの「想定」こそが、上述の、「二人組分析」における分析家の機能を規定するように思われる。これと相関して、「二人組分析」としての「精神分

析」については、これを「分析」を構成する複数の契機が複数の主体によって——「遡行」は患者ないし分析主体によって、「想定」は分析家によって——担われる操作である、とする定義がさしあたり可能になるだろう。

(2) エリーザベト・フォン・Rの治療の中で生じたこの出来事は、フロイトがこれをきっかけに「抵抗 (der Widerstand)」の問題に関心を持つようになったと述べているという点で重要である⁷³⁾。じっさい問題の「想定」は、単に一般に妥当することがすでに知られている事柄の領域から踏み出すというのみならず、他者たる患者の個別的な「抵抗」に抗ってなされなくてはならないゆえに、二重の意味で主体的な行為となる。この抵抗は、しばしば力の形象をもって語られるが⁷⁴⁾、しかし実際にそこで問題になっているのはむしろ、二つの「欲望」の闘ぎ合いである⁷⁵⁾。この欲望はまず、患者の側で明確に位置づけられる。

ヒステリー者の言う「知らない (Das Nichtwissen)」とは、本来は「知りたくない (Nichtwissenwollen)」——これは多かれ少なかれ意識化されている——ということであり、治療者の使命は、この連想に対する抵抗を心的作業によって克服することにある⁷⁶⁾。

こうした患者の欲望に相対する分析家の側では、患者に「迫ること (das Drängen)」すなわち探し求められている表象痕跡に患者の注意をむけるべく「強要 (der Zwang)」がなされるが⁷⁷⁾、これらの力動的な形象の背後にあるのはやはり一つの欲望である。フロイトによれば、患者の「知りたくない」という欲望による連想への抵抗は、単に連想の中断というかたちをとるだけでなく、連想が特定の要素を巧みに回避しながら進められるという場合もある。

しかし、患者から何の苦勞もせず、抵抗を受けることもなく得た陳述を、批判的な目で吟味してみるなら、必ずそこに亀裂や壊れた個所 (Lücken und Schäden) を発見することになるだろう。そこでは明らかに関連が途切れており、患者は決まり文句を用いることで、あるいは不十分な説明をすることで、その場しのぎの埋め合わせをしようとする。そこで医者とは、ある動機——正常な人間においてであれば、無力なものとは見なされるような動機——に突き当たるのである。患者はその裂け目に注意を向けるよう仕向けられても、それを認めようとはしない (Der Kranke will diese Lücken nicht anerkennen)。しかし医者とは、この脆弱な個所の背後に、より深層の素材への通路を求めればよい。また、まさにその個所において、連関の何本かの糸を——圧迫という手続きで辿ることによって——見出せるという望みを持ってよいのである⁷⁸⁾。

ここでは「望みを持つこと (hoffen)」と言われ、また別のところでは「期待 (die Erwartung)」と呼ばれているもの⁷⁹⁾が持っている、欲望としての——知の欲望としての——性格を否定することは難しい。分析家の二重に主体的な「想定」は、これによって条件付けられているのである。

症状や夢を「分割」し、得られた一切片を出発点とした連想のなかで「遡行」が目指される。そしてその「遡行」が滞ったところで敢えてなされる「想定」が、無意識の素材への道を拓く。この最後の「想定」については、「遡行」が踏み出すときになされていたはずの、症状の「意味」の想定を改めて引き受け直すという性格のものであると考えたほうがよいかも知れないが、さしあたり「分割」「遡行」「想定」のサイクルが、精神分析的「分析」の第一の局面を規定しているといつてよいだろう。ただしすでにみたように、これだけではフロイトが記述している手法のせいぜい半分を規定したことにしかない。「抵抗」が顕在化し、分析家によって敢えてなされる「想定」が何の成果もあげなくなったところから始まる、「分析」の第二の局面、フロイトが「分解、解体」という側面を強調していたこの局面は、われわれの観点からはどのように捉え直すことができるだろうか。

*

第一の局面における「分析」の最初の契機として症状や夢の「分割」が置かれていたわけだが、そこで問題なのはさしあたって連想の起点を定めるということであり、そこからヒステリーの誘因となるトラウマ的な出来事へと遡る、ということであった。これにたいして第二の局面における「分割」的な契機は、症状それ自体ではなく、それを症状たらしめているもののほうに適用される。『ヒステリー研究』の時点では、連想への「抵抗」として顕在化するのと同じ心的力が症状形成においても働いているとする考えから、症状の根幹には、欲望の或る特定の型式が、すなわち「知りたくない (Nichtwissenwollen)」があると考えられていた。「精神分析療法への道」においては、そうした欲望が、患者が不十分にしか知りえない、症状の背後にある「動機」ないし「欲動の蠢き」として提示されている。そこで「分割」としての分析とは、症状をそれらの合成物として提示するという点に存するのである。

この分割についてはまず、それが限られた数の欲動要素の組み合わせに「症状」を含む人間の心の活動を還元しようとするものであるという点で、上で見た論理学的分析の場合と同様に、ある種の一般化——いわゆる「リビド的な類型」⁸⁰⁾——に向けて開かれているという点を指摘する必要があるだろう。しかしより重要なのは、このそれぞれの要素が優勢となる時期が主体の発達の初期にあると考えられていることによって、この「分割」が同時にある種の「遡行」の道を拓くという点である。「症状」を、そして「抵

抗」を引き起こすような主体の欲望のあり様は、主体のリビードの発達のある時期において優勢を占めていた欲望の構造が力をふるい続けるという現象、いわゆる「固着」にその原因を求められるようになる。発達の過去を症状の現在に接続するこの「固着」が、「廻行」の一つのあり方を提示しているのである。ただしこの「廻行」の様態は、第一の局面とは異なっている。というのも、「抵抗」の最たるものとしての「転移」においては、過去の間主体的関係が再現しているまさにその限りにおいて、第一の局面における「廻行」の場合とは反対に、「廻行」はある意味ですでに実現してしまっているからだ。そして実現してしまっている「廻行」をまさに「廻行」として提示するという点に、分析的介入の意義は求められているのである。

症状の背後に、そもそもその原因を無意識たらしめ、無意識の領域に維持しつづけている欲望の働き、「知りたくない (Nichtwissenwollen)」を想定し、さらに、抵抗というかたちで現勢化したその欲望を、欲動への「分割」によって認識させるとともに、その欲動が優勢であった発達のある段階への「固着＝廻行」として、あるいは発達の初期に重要な役割を演じた他者との関係の「転移」として位置づける。ここで「廻行」が実現されるべき奥行きを開いているのは、他でもない「欲望」である。満たされない限り残り続けるというその性質こそが、時間の厚みの中に、廻行が行われるべき道をあらかじめ切り拓いてしまっているというわけだ。ただ、こうして行われる精神分析的「分析」の対象の再定義は、われわれに一つの問題を提起する。すなわち発達の初期に位置づけられる、身体的な満足に関わるものであれ、いわゆる愛情に属するものであれ、一般に「他者」に向けられる「欲望」と、症状の現在における「知の欲望」、より正確には「知りたくないという欲望」の間の距離という問題であり、どのようにして前者が後者を条件づけているのかという問題である。この愛と知の絡み合いの問題は、フロイトの問題を継承しこれを独自に深化したジャック・ラカンによってより詳細に展開されているが⁸¹⁾、フロイトの初期にすでにその手がかりとなる議論がある。

ここで鍵となるのは、満たされていない欲望の相関項として、その欲望をかつて満たしたことのあった対象の回想像が、幻覚的に——つまり現実の知覚と混同されかねないような仕方で——賦活される、とする構想だ。われわれの日常的な経験からも了解しうるこうした機制について、フロイトはまず『ヒステリー研究』刊行直後の時期に執筆された『心理学草案』において、ニューロンシステムとその中を流れる一種のエネルギーからなるモデルによって記述を試みているが⁸²⁾、これは1900年の『夢解釈』のなかでも再度取り上げられている⁸³⁾。この延長線上に、すでに見た、「[……] 愛への願望 (Liebesbedürftigkeit) が現実によって限なく満足させてもらえない者は、新たに登場してくるあらゆる人物に向かって、リビードにみちた期待表象 (libidinösen Erwartungsvorstellungen) を抱かざるをえないことになる」という、「転移」の現象の根本にある機制は位置づけられる。この観点から見れば、いわゆる「イマージ」はまず、こうした満たされない欲望

の相関項として賦活された対象の回想像だということになるだろう。

幻覚的な回想像にせよ、イマージにせよ、まず強調されるのはそれらが現実から乖離していることによって生み出す否定的な効果であった。ところが興味深いのは、とりわけ『心理学草案』において、これが思考のプロセスの起点として位置づけられているということだ。フロイトが繰り返し言及するのは乳児の例である。乳児が飢えを感じたとき、以前の授乳の際に得られた、母の乳房を正面から見た視覚像が幻覚的に再生されたとしよう。これは存在しない対象を目の前に描き出す限りで、乳児を欺くものであり、それ自体は幻滅しかもたらすことはない。しかしそれと同時に、部分的に重なる知覚、たとえば側面から見られた乳房の知覚像が与えられたとき、その差異が「関心 (das Interesse)」を呼び起こし、両者の間に (たとえば頭を動かす運動の運動像を介して) 同一性を打ち立てようとするプロセスが起動する。そしてこの「思考 (das Denken)」のプロセスを介して、フロイトは現実への関係が成立すると考えるのである。

精神分析的「分析」の第二の局面は、われわれを症状の水準からその症状を支える欲望の水準へと移行させたのだが、この欲望のうちにすでに、「与えられていないものを、にもかかわらず与えられたとする」特異な所与性の契機が内在している。これを「想定」と呼ぶことは、たしかに飢えと乳房の視覚像といった身体的な欲求の水準では難しいかも知れない。しかし間主體的な愛情関係の水準では事情が異なってくる。ラカンの観点から整理した母子関係を例に考えてみよう。母への愛は、具体的には母の現前の欲望——母にそばにいてほしい——という形を取るが、この欲望は限なく満たされることはない。というのも母はいつもどこかに行ってしまうからだ。この問題を前にして、子供は母の不在の原因を考えるように導かれる。ラカンはこちらで、子供が母を、自分と同様に欲望する存在と想定し、その想定をもとに母の現前を維持する手立てを考えようとするのだと考える。これがいわゆる「欲望 (ないしファルス) の公準」である⁸⁴⁾。こうした他者への愛の関係の中でイマージにあたるものとは結局、その他者の姿や声、要するにその他者の現前の回想像であると同時に、その他者に想定された欲望に他ならない。そして続くエディプスの弁証法では、この想定のもとで他者の欲望を——その対象を、そしてその何たるかを——「知る」ということが問題となる。

「症状」と「抵抗」が、いずれもそれに依拠しているような欲望。この欲望を、精神分析的「分析」はその第二の局面において、欲動動機の要素へと「分割」し、その同じ身振りでリビードの発達史における「遡行」(ないしその顕在化)を果たす。そしてその起源的な場面で見いだされたのは、フロイトにおいては外界というかたちで、ラカンにおいては他者というかたちで主体に突きつけられる問題にとって、その解決への一歩となるような特異な所与性の様態であった。これを仮に「想定」と呼ぶことが許されれば、精神分析的「分析」の第二の局面においてもまた「分割」「遡行」「想定」のサイクルが、しかし異なった深度で繰り返されるということになる。さらに付け加えて言え

ば、そこでは各契機の担い手となる主体の交代も実現している。「想定」を引き受けるのはもはや分析家ではなく分析主体であり、「廻行」を実際に「廻行」にするのは分析家の役目になっているからだ。こうして「分割」「廻行」「想定」の三つの契機を、担い手を交代しつつ、異なった深度で順番に辿ってゆく、下降的な螺旋運動が構想される。この運動こそが、フロイトの記述する「分析」概念——「分割」への近代的な縮減から距離を取りながら、古代ギリシャ的な「分析」にも回収されない、すぐれて二〇世紀的な「分析」概念——の布置を規定しているのである。

注

- 1) Jacques Lacan, *Le Séminaire, Livre XI, Les Quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Ed. du Seuil, Paris, 1973, pp. 11–14 (ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』(岩波書店、2000年) pp. 8–12)。
- 2) Louis Althusser, *Psychanalyse et sciences humaines: deux conférences*, Le Livre de poche (Librairie Générale Française/IMEC), Paris, 1996, pp. 78–79 (ルイ・アルチュセール『精神分析講義：精神分析と人文諸科学について』(作品社、2009年) pp. 117–118)。ここでアルチュセールは、新たな学問分野の創出が、新たな対象の定義に対応していることを示唆しているが、これはラカンのセミネールでの発言と呼応している。「科学の特徴、それは対象を持っていることです。科学は、「実験」と呼ばれる再現可能な操作によって定義される対象をすくなくとも持っている、と言うことができます。しかしわれわれはきわめて慎重でなくてはなりません。というのもこの対象は変化するからです。とりわけ科学の進歩につれて変化するからです」(Lacan, *ibid.*, p. 139 (ラカン、*ibid.*, p. 10))。
- 3) Althusser, *ibid.*, p. 91 (アルチュセール、*ibid.*, p. 132)。
- 4) Sigmund Freud, *Gesammelte Werke : Chronologisch geordnet*. Erster Band. Werke aus den Jahren 1892–1899. Imago Publishing Co., Ltd./ Fischer Taschen Verlag, Frankfurt am Main, 1952 [1999], p. 416。(以下本全集への出典指示はGWに巻号数を付してGW-1等と略記する。)
- 5) フロイトから著作の仏語圏への紹介を委ねられたスイスのアルフォンス・メデルは、1907年の論文「日常生活の精神病理学への諸寄与」(Alphose Maeder, « Contributions à la psychopathologie de la vie quotidienne », *Archives de Psychologie*, Genève, 1907, pp. 148–152)でこの表記を採用しているほか、フランス語圏での最初のまとまったフロイトの紹介である、エスナールとレジスの著書の表題でも同じ表記が採用されている(Cf. *La Psychoanalyse des névroses et des psychoses, ses applications médicales et extra-médicales*, Ed. Alcan, Paris, 1914)。ただメデルの上記論文を紹介する同年の『精神医学雑誌』の記事では、引用符つきながらすでにpsychanalyseの表記が見られる(Cf. *Revue de psychiatrie et de psychologie expérimentale*, 1907, p. 130)。ここにドイツ語綴りに準拠した用語の採用をよしとしない、フランス的な「精神分析への抵抗」の最初の現れをみることもできるだろう(この抵抗の諸相については以下の拙論を参照されたい。Cf. 原和之、「抵抗」するフランス——精神分析の言語論的展開への道、石井洋二郎/工藤庸子編、『フランスとその〈外部〉』(東京大学出版会、2004年)、pp. 51–70)。なお『フランス語宝典 *Trésor de la langue française*』によればpsychanalyseという用語の初出は、同じくメデルの1909年の論文「象徴について」(« A propos des symboles », *Journal de psychologie normale et pathologique*, n° 1, Janvier-février 1909, pp. 46–51)とされている。早い段階でメデルがpsychoanalyseという、フロイトに由来する表記を放

棄したのは、彼がユングの側につく形で、やがてフロイトと袂を分かつことになるのとも無関係ではないだろう。

- 6) Cf. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Volume III (1893–1899): Early Psycho-Analytic Publications*, p. 47. (以下標準版全集への参照はS.E.と略記する。)
- 7) 同様の用例は同じ年の論文「ある特定の症状複合を「不安神経症」として神経衰弱から分離することの妥当性について」(「心理学的分析によって (bei psychologischer Analyse)」(GW-1, p. 322))や「強迫と恐怖症、その心的機制と病因」(「これらの症例の些細な分析 (une analyse psychologique scrupuleuse de ces cas)」(GW-1, p. 346))でも確認できる。
- 8) 「暫定報告」として1893年に公刊されたこのテキストは、後に『ヒステリー研究』(1895)の冒頭に組み込まれた。
- 9) Cf. 「わたしにとりわけ興味深く思われるのは、感覚脱失のある上下肢で示される患者の運動障害についての分析です」(「あるヒステリー男性における重度片側感覚脱失の観察」(1886)、『フロイト全集1』(岩波書店、2009年、以下『全集1』。同全集の各巻についても、初出後は同様の略記を採用する。角括弧内の数字はGWの対応する巻の頁を示す) p. 157 [62])。[「……」これらの障害については、将来かならずやヒステリーに特徴的な変化が見いだされるであろうが、今日までその分析には着手されてこなかった」(「ヒステリー、ヒステロエPILEPSIE (事典項目)」(1888)、『全集1』 p. 198 [81])。]「ヒステリーは、ヒステリー以外の多くの——神経症によるものであれ器質性のものであれ——神経疾患と合併しうる。こういったケースはその分析に非常な困難を来す」(『全集1』 p. 203 [85–86]。英訳の編註では、「もちろん精神分析という意味ではない」と指摘されている。Cf. S.E. 1, p. 153)。「だが私は、付随する器質性損傷のない、少なくとも、いかに繊細な分析をもってしても、目につく程の大きな損傷が見あたらない、機能変性が存在しうることを示してみたいと思う」(「器質性運動麻痺とヒステリー性運動麻痺の比較研究のための二三の考察」(1888)、『全集1』 p. 373 [52])。いずれも強調はわれわれによる。
- 10) 「『ヒステリー研究』に関連する三篇」(『全集1』 pp. 301–309 [GW-17, 3–18])に含まれるプロイアー宛書簡と「暫定報告」の草稿二篇(三節および四節に対応)は、いずれも1892年に執筆が確認ないし推定されている。
- 11) 『フロイト全集2』(岩波書店、2008年) p. 10 [GW-1, 85] (強調はフロイトによる)。
- 12) ビュルクは金属との接触によるヒステリーの治療の症例を1849年以降報告しはじめ、1876年にはシャルコーに対して、彼の担当する区画の患者にこの療法を適用させてほしいと依頼した。シャルコーは、ヒステリー症状の解消が、単に金属との接触によるだけでなく、電気や磁力、機械的振動などによっても生ずることを発見し、これを生物学会に報告、学会ではシャルコーを含む「委員会」を構成しこの現象を確認したとされる(エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』(青土社、1998年) pp. 168–178)。これについては、「電流」による物理的な性質の現象とする考え方と、「想像力」による心的な性質のものとする考え方の両方が存在した(Gilles de la Tourette, *Traité clinique et thérapeutique de l'hystérie, d'après l'enseignement de la Salpêtrière*, E. Plon, Nourrit et Cie, Paris, 1891, pp. 209–217)。
- 13) そしてこの同じ身振りを、刑事事件をおこして拘置所に収監されたパラノイア患者から症状が消失したという事例をもとに「自罰パラノイア」という病像を導いたラカンものちに繰り返すことになる(cf. ジャック・ラカン『人格との関係から見たパラノイア性精神病』(朝日出版社、1987年))。
- 14) Ernest Jones, *The Life and Work of Sigmund Freud*, edited and abridged by Lionel Trilling and Steven Marcus, Anchor Books, New York, 1963, p. 144 (アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』(紀伊國屋書店、1969年) p. 160)。

- 15) 兼本浩祐「解題」『全集 1』p. 575. ちなみにフロイトは 1888 年から 1889 年にかけてフランスのナンシーで活動する催眠術師イポリット・ベルネームの著書『暗示とその治療効果』を翻訳出版したほか、催眠に関する著作の書評などの一連の著述を行っている。
- 16) Cf. 兼本浩祐「解題」『全集 1』pp. 575–576、またピーター・ゲイ『フロイト 1』（みすず書房、1997 年）pp. 72–74.
- 17) 症例ミス・ルーシー・R では、この女性患者がほとんど催眠下で夢遊状態になることがなかったことから、フロイトはベルネームの施術例を参考に、覚醒状態の患者に対して前額を圧迫して想起を促す方法（圧迫法）を取るようになった（『全集 2』pp. 134–138 [165–169]）。また同様の問題は症例エリーザベト・フォン・R でも生じている（『全集 2』p. 185 [208]）。
- 18) Peter f. Swales, “Freud, His Teacher, and the Birth of Psychoanalysis”, in P. E. Stepansky (ed.), *Freud, Appraisals and Reappraisals*, vol. 1, Hillsdale, N. J.: Analytic Press, 1986, pp. 26 and 55.
- 19) 1897 年 2 月 8 日のフリース宛書簡を参照（『フロイト フリースへの手紙 1887–1904』（誠信書房、2001 年。以下『手紙』。角括弧内は下記のドイツ語版の頁番号を示す。Cf. Sigmund Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess, 1887–1904*, Ungekürzte Ausgabe, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1986）p. 236 [243]）。
- 20) Gelfand, Toby, « Mon cher docteur Freud » : Charcot’s Unpublished Correspondence to Freud, 1888–1893, *Bulletin of the History of Medicine*; Winter 1988; 62,4; p. 584.
- 21) 『全集 2』p. 227 [246].
- 22) 『全集 2』p. 227 [246].
- 23) 『全集 2』pp. 227–228 [246–247]. 強調はわれわれによる。
- 24) 『手紙』pp. 12–13 [12–13]. ちなみにこの時期は、エミー・フォン・N 夫人の治療の開始（1889 年 5 月）後まもない時期にあたる。
- 25) 『手紙』p. 17 [17].
- 26) 『全集 1』pp. 301–302 [GW-17, 5–6], また Albrecht Hirschmüller, *The Life and Word of Josef Breuer: Psychology and Psychoanalysis*, New York University Press, New York and London, 1989（ドイツ語原書の出版は 1978 年）p. 386, 註 493.
- 27) これに関しては、1893 年の「暫定報告」に現れる発症と治癒のメカニズムに関する構想が 1888 年頃に遡ることを示唆する見解もあることを付記しておく。Cf. S.E. 1, p. 159, および『全集 1』「解題」p. 599.
- 28) 『手紙』p. 61–62 [63]（1894 年 4 月 19 日）。
- 29) 『手紙』p. 103 [106]（1895 年 1 月 24 日）。
- 30) 『手紙』p. 155 [158]（1895 年 11 月 29 日）。
- 31) 上記のような成立事情に加えて、1894 年 2 月 7 日付フリース宛書簡には、その時点で全体の半分が出来上がり、一部の病歴と「二つの一般的な章」が欠けている旨の記述がある（『手紙』p. 59 [60]）。この「二つの一般的な章」については、最終的にブロイアーの執筆した「理論的部分」およびフロイトの手になる「ヒステリーの精神療法のために」にあたると考えられるが、後者についてフロイトは 1894 年 6 月 22 日付フリース宛書簡でまだ着手していないと述べている（『手紙』p. 75 [77]）。
- 32) Cf. 「こういう場合でも、一つの症状が「語って除去」される際に、必ず観察されることがあった。こうした症状は、語られる際に、強度を増して出現したのである。例えば彼女の難聴を分析している最中に、あまりにその程度がひどくなるので、部分的には筆談で彼女と疎通を図らなければならなかった」（『全集 1』p. 44 [235]）。「そういうわけで、私は「焦げたケーキ」の匂いを分析の出発点に据えることに決めた」（『全集 1』p. 134 [165]）。
- 33) 『全集 1』p. 7 [82].

- 34) 圧迫法を施すことで想起された一連の単語(「門番」―「肌着」―「町」―「粹付き荷車」)をもとに、過去のトラウマ的な出来事(姉の発狂と強制入院)が想起された事例を参照。Cf.『全集 2』p. 351 [276-277]。
- 35) 病歴の章では分析を「原因」をあきらかにするものとして一意的に規定している箇所は比較的少ないが、「ヒステリーの精神療法のために」の章では「病因」や「因果」という言い方が繰り返し現れる。Cf.「私は、催眠下の精神療法でも通常行われているように、保証や禁止、ありとあらゆる種類の対立表象の導入によって、現に存在する病的な諸表象と戦った。しかし、それだけに甘んじていたわけではなく、個々の諸症状の成立史を調べ、病的な諸観念が構築される土台であった諸前提と戦い得るようにしたのである。こういう分析の最中、[……]」(『全集 2』p. 126 [158]);「もし私がこの段階でこの女性患者の心の治療を断念していたとすれば、エリーザベト・フォン・R嬢の症例はおそらくヒステリー理論にとって全く無価値なものとなっていたであろう。しかし私は分析を続行した。ヒステリー症状が何に起因しているのか、何によって規定されているのかについての理解が、意識のより深い層から得られるであろうという確固たる期待を抱いていたからである」(p. 185 [208]);「こうした次第で、私はさしあたって催眠を使わずに済ますことができた。もっとも、後に告白の過程で彼女の想起では十分に解明できない文脈が生じてきたときには催眠を用いる、という留保付きでであった。このようにして私は、ヒステリーに対して初めて完全なる分析を行うこととなり、それを通じて一つの手続きに到達したのである。後に私はこの手続きを一つの手法にまで高めて、目標を意識して導入することとなる。この手続きは、病因となる心的素材を層ごとに除去していくというやり方であり、我々はそれを埋没した町を掘り起こす技法に好んでなぞらえたものであった。私はまず女性患者に知っていることを語らせた。そして、つながりが謎めいている個所がどこにあるのか、因果の連鎖の中で欠落部分があるように見えるのはどこかについて入念に注意を払った。そしてその後そういう個所を見出すと、私は催眠術的な探求やそれに類似した技巧を用いて、想起のより深い層へと押し入ったのである」(p. 177-178 [201])。「その際、ヒステリーの機制を示すものがまず消え去る。そして、その間に、そこに現れている残りのものをこの分析によって解釈し、病因にまでさかのぼる術を私は学んだ」(p. 339 [266]、ここまでいずれも強調はわれわれによる)。なおフロイトは不安神経症に関する彼の論文についてなされた批判に応答するという文脈で、「原因」の概念を四つに区分して詳細に検討している。Cf.「不安神経症」に対する批判について」(『全集 3』pp. 109-131 [357-376])
- 36) 上記註の三つ目の引用、および以下を参照:「なぜならば、分析は最も内密で、最も深奥の秘密として隠されている心的事象へと必ず至るからである」(『全集 2』p. 337 [265])。
- 37) 「情動を伴わない想起は、殆どの場合全く何の作用もない。最初に経過した心的過程は、可能な限り生き生きと反復され(wiederholt)、《それが生じたときの状態[statum nascendi]》へと戻され、「語り尽くされ」なければならない」(『全集 2』p. 10 [85])。
- 38) 「しかし、先に述べておいたように、彼女が不安と恐怖にがたがた震えてこのすべての驚愕像を再現させて(reproduziert)語り尽くしてしまうと、彼女の心は完全に自由になったのである」(「症例アンナ・O」『全集 2』p. 35 [228f.])「私は、興奮を引き起こすすべての印象を再現させること(Reproduzieren)により事後的に浄化反応させることで、この「鬱滞ヒステリー」を解消しようと努力した」(「症例エリーザベト・フォン・R」『全集 2』p. 219 [239])。
- 39) 「こうした治療の可能性を、デルプフとビネは、次の引用が示すように、はっきりと認識していた。デルプフ「動物磁気」(パリ、一八八九年)、「《このようにして、いかなる方法で磁気療法家が治癒を促進するのが明らかになる。磁気療法家は、患者を病気が発現した

状態へと戻し、それを再生させながら、言葉を用いてその病気と闘う》。——ビネ『人格の変質』（一八九二年、二四三頁）、「《治療者が、患者を心的技巧でもって症状が最初に現れた瞬間に戻らせ、その患者をより治療的暗示に従いやすくするということを、おそらく我々は見出すことになるだろう》」（『全集 2』 p. 11 [86]）。

- 40) 「或る仕方」というのは、目指されているのは必ずしも幻覚的な再生だけではないからだ。想起されている出来事への没入、いわば「疎外」の強度が「情動」の再生によって示される一方で、治療的な効果が生じるためには、一定の「分離」が「言葉を与える」ことによって実現されていなくてはならない。
- 41) Cf. 「いくつかの症状を呈する症例から出発すると、どの症状からでも、私たちは分析を手段として一連の体験へと到達します。そして、これらの体験の想起は連想の中で互いに結びついています。個々の想起連鎖は最初は明瞭に分離した状態で後方へ（rückwärts）と向かいますが、すでに述べたように、枝分かれしています」（『全集 3』 p. 228 [433]）。
- 42) 「精神分析療法の道」『フロイト全集 16』（岩波書店、2010 年） pp. 94–95 [GW-12, 184–185]。
- 43) 「「横暴な」精神分析について」（1910）『フロイト全集 11』（岩波書店、2009 年） p. 240 [GW-8, 123]。
- 44) 「転移の力動論にむけて」（1912）『フロイト全集 12』（岩波書店、2009 年） p. 212 [GW-8, 366]。
- 45) *Ibid.*, pp. 209–210 [365]。
- 46) 『ヒステリー研究』『全集 2』 p. 386 ff [GW-1, 308 ff]。
- 47) 「転移の力動論にむけて」（1912）『全集 12』 pp. 210–211 [365–366]。
- 48) この節の記述については、以下の拙論のうち「分析」概念の「二重の起源」を論じた部分を元になっている。Cf. Kazuyuki HARA, « La naissance de l'*homo analyticus* : Pour une histoire de l'idée d'analyse », in *Amour et savoir : études lacanienne*, Collection UTCP 9, 2011, pp. 35–243。
- 49) この意味での「分析」の起源は、少なくともキオスのヒッポクラテスに遡るといえる。Cf. 斎藤憲『ユークリッド『原論』の成立：古代の伝承と現代の神話』（東京大学出版会、1997 年）、p. 31 および p. 178。
- 50) *Les Œuvres d'Euclide, en grec, en latin et en français, d'après un manuscrit très ancien qui était resté inconnu jusqu'à nos jours*, tome III, tr. par F. Peyrand, C. F. Patris, imprimeur-librairie, Paris, 1818, p. 225。仏訳からの翻訳。なお、この分析と総合による別解はギリシャ語の手稿及びラテン語・ギリシャ語版に含まれているが、ハイベルクのように本文ではなく補遺に入れる立場もある（Cf. Euclide d'Alexandrie, *Les Eléments*, vol. IV, traduction et commentaire par Bernard Vitrac, PUF, Paris, 2001, p. 392）。
- 51) Pappus d'Alexandrie, *La Collection mathématique*, tome II, tr. par Paul Ver Eecke, Albert Blanchard, Paris, 1982, p. 477。
- 52) 斎藤憲、*op.cit.*, p. 31。
- 53) なお、数学の分野での「分析」としてはもう一つ、問題が解かれ、求める量が与えられたと想定して、既知の量と未知の量の間の関係を表した上で、この関係を可能な限り単純化することで最終的な解を得る、という手法がある。未知数を利用する代数的な問題解法を「分析」と名付けることで「分析」の歴史において大きな役割を果たした 17 世紀の数学者フランソワ・ヴィエトは、この種の分析を「真理探究的 *zététique*」と形容し、幾何学における「不定命題的 *poristique*」な分析と区別する。後者と比較したときに、前者は「総合」のプロセスが実質的には検算となつてほぼ不要になるという点が特徴的だが、未知数というかたちで、与えられていないものを、にもかかわらず与えられているとする契機を含む点は共通していると言えるだろう。

- 54) Alexander of Aphrodisias, *On Aristotle's Prior Analytics 1.1–7*, translated by Jonathan Barnes, Susanne Bobzien, Kevin Flannery, S. J., and Katerina Ierodiakonou, Cornell University Press, Ithaca, New York, 1991, pp. 49–50. 「総合 σύνθεσις」には「複合 compounding」という訳語が与えられているが、邦訳としては「総合 (されたもの)」と表記した。
- 55) Paul Tannery, « Du sens des mots analyse et synthèse chez les grecs et de leur algèbre géométrique », in Jules Tannery, *Notions de mathématiques*, C. Delagrave, Paris, 1903, pp. 327–333.
- 56) *Ibid.*, p. 328.
- 57) *Ibid.*, pp. 329–330.
- 58) Patrick H. Byrne, *Analysis and Science in Aristotle*, State University of New York Press, Albany, 1997, pp. 10–11.
- 59) バーンは『詭弁論駁論』の一節 (第 16 章 175a31) を翻訳・解釈する中で、詭弁家の議論が必ずしも知解可能な形で結合されておらず、単に「一緒につなが合わされている (strung together)」と指摘し (*Ibid.*, pp. 18–19)、そこから「分析」される以前の論証を「言葉の連なり (a string of words)」という言い方で呼んでいる (*Ibid.*, p. 21)。
- 60) *Ibid.*, p. 21.
- 61) *Ibid.*, p. 25.
- 62) *Ibid.*, p. 21.
- 63) 一例として、*Stanford Encyclopedia of Philosophy* (ウェブサイト版) に収録されたさまざまな辞書の「分析」の定義を見ると、ほぼ様に「分割」を主要な語義として採用していることが分かる。(Cf. « 1. Definitions of Analysis » in « Supplement to Analysis », <http://plato.stanford.edu/entries/analysis/sl.html#1> (2014 年 2 月 5 日確認))
- 64) ベーコン『ノヴム・オルガヌム』(岩波文庫、1978 年) pp. 40, 44. (原文に照らして訳語を改めた)
- 65) Byrne, *ibid.*, pp. 215–216. バーンは以下の部分を参照させている。「数学と同様、自然哲学においても、難解な事柄の研究には、分析の方法による研究が総合の方法につねに先行しなければならない。この分析とは、実験と観測をおこなうことであり、またそれらから帰納によって一般的結論を引き出し、この結論に対する異議は、実験または他の確実な真理からえられたもの以外は認めないことである。なぜなら、仮説は実験哲学では考慮されるべきではないからである。[...] この分析の方法によって、われわれは複合物からその成分へ、運動からそれを生じる力へ、一般に、結果からその原因へ、それも特殊な原因からより一般的な原因へと進むことができ、ついにはもっとも一般的なものに到達して論証は終る。これが分析の方法である。そして総合とは、発見され、原理として確立された原因をかりに採用し、それらによってそれらから生じる諸現象を説明し、その説明を証明することである」(ニュートン『光学』(岩波文庫、1983 年) p. 356)。
- 66) 註 48 ですでに言及した拙論のなかで、これについてはひとつの筋道を示しておいた。
- 67) 『夢解釈 I』『全集 4』p. 141 [108].
- 68) 『夢解釈 I』『全集 4』p. 142 [108].
- 69) 『全集 2』p. 177 [201].
- 70) 『全集 2』p. 185 [208].
- 71) 『全集 2』p. 196 [218]. 強調はわれわれによる。
- 72) 「無意識の境位は存在的な水準では非常に脆弱であると指摘しましたが、無意識の境位は本来倫理的なものです。真理を渴望するなかでフロイトはこう言っています。「事情はどうかあれ、とにかく、進まなければならない」と。なぜなら、どこかにこの無意識が現れているからです」(Jacques Lacan, *Le Séminaire, Livre XI, Les Quatre concepts fondamentaux de la*

psychanalyse, Ed. du Seuil, Paris, 1973, p. 34 (ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』(岩波書店、2000年) p. 42))。

- 73) 『全集 2』 p. 197 [219].
- 74) 「病因となる諸表象が意識化されること(想起すること)に対して抵抗する心的力が患者の内には存在するのであり、私は心的作業を通じてその心的力を克服しなければならないのだ」(『全集 2』 p. 341 [268])。「患者の自我に対してある表象が近づいてきたとして、その表象が相容れないものだということが明らかとなり、自我の側からの反発力を呼び起こしたとすれば、その反発の目的は、この相容れない表象に対する防衛にある。この防衛が実際に成功すると、当該の表象は意識からも想起からも追いやられてしまい、その表象の心的痕跡は見かけ上見出せなくなってしまう。しかし、この痕跡はどうしてもそこに残らざるを得ない。患者の注意をその痕跡に差し向けようと努力するとき、私は抵抗としての力を感じるようになったわけだが、この力は症状発生の際に反発として現れたのと同じ力なのである」(『全集 2』 p. 342 [269])。
- 75) すぐあとで見るように対応するドイツ語としては *wollen* およびその派生語を念頭に置いている。これを「欲望」と訳すのは必ずしも一般的でないが、ここでは「知りたいという欲望 *Cupido sciendi*」を「欲望 *désir*」という語の翻訳として提案するラカンの観点(Jacques Lacan, *Le Séminaire, Livre V, Les formations de l'inconscient*, Ed. du Seuil, Paris, p. 380) からこの用語を採用した。
- 76) 『全集 2』 p. 343 [269].
- 77) 『全集 2』 pp. 343 [269–270].
- 78) 『全集 2』 pp. 374–375 [297–298].
- 79) 「こういった作業全体の前提となっていたのは、症状のすべてを完全に規定しているものは何であるかを、この作業が証明するであろうという期待(*die Erwartung*)であった。」(『全集 2』 pp. 177–178 [201])、また「もし私がこの段階でこの女性患者の心の治療を断念していたとすれば、エリーザベト・フォン・R嬢の症例はおそらくヒステリー理論にとって全く無価値なものとなっていたであろう。しかし私は分析を続行した。ヒステリー症状が何に起因しているのか、何によって規定されているのかについての理解が、意識のより深い層から得られるであろうという確固たる期待(*der sicheren Erwartung*)を抱いていたからである」(『全集 2』 p. 185 [208])。
- 80) 「リピード的な類型について」『フロイト全集 20』(岩波書店、2011年)
- 81) ラカン初期の議論に表れたこの問題系を取り上げたものとしては、以下の拙論を参照されたい。Cf. 原和之、「精神分析」を待ちながら——ジャック・ラカンにおける欲望の「公準」、『思想』、第 1034 号、岩波書店、2010 年 6 月、pp. 101–121.
- 82) 「圧迫状態ないし欲望状態が再出現すると、備給は二つの想起へも移行し、それを生気づける。欲望によって生気づけられるのは、まずは対象の想起像のほうであろう。[/]私の考えでは、こうした欲望による生気づけがまずは知覚と同じものを、つまり幻覚を生み出すということは疑いない。これに続いて反射的行為が開始される場合、幻滅が起こらずにはすまない」(「心理学草稿」『全集 3』 pp. 31–32 [412])。
- 83) 「何らかの経路で、子どもの場合なら余所からの助けによって、内的な刺激を終息させる満足体験の経験が得られて初めて、向け換えが起こりうる。この経験の本質的な構成要素は、ある一定の知覚(たとえば栄養補給)の出現であり、その想起像は、その時から、欲求興奮の記憶痕跡と連想関係で結ばれたままになる。この欲求が次の回に出現すると、先ほど作られていた結び付きのおかげで、あの知覚の想起像に再び備給を与えて、その知覚そのものをもう一度喚起し、かくして本来のあの最初の満足の状況を再び作り出そうとする心的

な蠢きが發生するのである。こういう蠢きこそ、われわれが欲望という名で呼んでいるものである。その知覚の再出現が、欲望成就というものである。そして欲求興奮によって完全な知覚備給が起ることが、欲望成就への最短の道である。心的装置の次のような原始的な状態を仮定することを妨げるものはない。すなわち、原始的な心的装置の中ではこの最短の道が実際に歩まれるのであり、諸欲望はそれゆえ幻覚することによって出口を見出すのである。したがってこの最初の心的活動は、知覚同一性を、すなわち欲求の満足と結び付いたあの知覚の反復を、目指すものなのである」(『夢解釈Ⅱ』『全集5』pp. 361-362 [571])。

- 84) ラカンによる前エディプス期の母子関係の理解については、以下の拙論を参照されたい。
Cf. 原和之、分析人(ホモ・アナリティクス)の誕生、『大航海』、59号、2006年6月、pp. 72-79.